

マザー・テレサ

2005(平成17)年6月29日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督＝ファブリツィオ・コスタ／出演＝オリビア・ハッセー／セバスティアノ・ソマ／ラウラ・モランテ／ミハエル・メンドル／イングリッド・ルビオ／エミリー・ハミルトン
(東芝エンタテインメント配給／2003年イタリア・イギリス映画／116分)

……「最も貧しい人々のそばにいたい」という信念を、死ぬ直前まで実践したマザー・テレサの一生を描く伝記映画。既に50歳を超えたあのオリビア・ハッセーが、無私無欲で人に尽くすことに一生を捧げた女性の姿を熱演！ 教団の組織化の必要性を訴える野心家や官僚的体質をもったリーダーたちに対する、「私は神が手に持つペンにすぎない」という信念にしたがったマザー・テレサの決断がすごい！ こんな映画を観ていると、キリスト教のすばらしさを実感するのだが……？

意見の対立はどの世界でも……？

映画の冒頭は1946年、インドのカルカッタが舞台。マザー・テレサはこの時36歳。修道女として女子校で教鞭をとっていた。カルカッタではヒンズー教とイスラム教の対立が続いていたうえ、第2次世界大戦終了直後という時代、インドは貧しく、人々は飢えと病気に苦しんでいた。

そんな中、カルカッタにあるキリスト教の修道院や学校は、それなりの役割を果たしていたが、修道院の外に飛び出して、貧しい人々に奉仕するための院外活動をやろうとするマザー・テレサ（オリビア・ハッセー）とそんな危険なことは許されないとする修道院長のマザー・ドゥ・スナークル（ラウラ・モランテ）との対立が……。

私が考えるに、この論点についてはどちらかというとなら修道院長の主張が従来からの正論であり、マザー・テレサの主張はあまりにも急進的すぎるもの……。し

かしエクセム神父（ミハエル・メンドル）の口添えによってバチカンの決定に委ねられたマザー・テレサの主張は、なぜか先例に反してオーケーに……。これはもちろんマザー・テレサの熱意によるものだが、ひょっとしてここにも「見えざる神の手」が……？

マザー・テレサは頑固モノ……？

マザー・テレサは神から命じられたとする自己の信念に従って行動しているのだが、私が見る限り、このマザー・テレサはかなりの頑固モノ……？ マザー・テレサが神の啓示を受けたのは、行き倒れになった1人の男性の「私は渴く」というイエス・キリストと同じ言葉から。ここらあたりは、「立って祖国を救え！」という神の声を聞いたという、ジャンヌ・ダルクと同じような、女性特有の能力によるもの……？

この神の声を聞いた後のマザー・テレサの「奉仕のための行動」は徹底している。院外活動の承認や新たな「神の愛の宣教者会」（教団）の設立そして「死を待つ人の家」の開設活動などにおけるマザー・テレサの行動を見てみると、その姿は頑固モノそのものだが、それも「なるほど」とよくわかる。なぜならマザー・テレサの行動原理は、「それが神の望みであれば必ず実現する」というきわめてシンプルなものなのだから……。

マザー・テレサの奉仕活動の純粹さに心を打たれたヴァージニア（のちのシスター・アグネス、イングリッド・ルビオ）やイギリスからわざわざカルカットまでボランティア活動のためにやってきたアンナ（エミリー・ハミルトン）などは何の疑いもなくマザー・テレサの方針に従っていたが、他方では別の不穏な動きも……？

ここでも問題は権威主義と官僚主義……？

マザー・テレサの「神の愛の宣教者会」は複雑な規約も組織の役職もないいい加減（？）な組織。教団は個人からの寄付を受け入れ、それをあちこちの奉仕活動に使用し、マザー・テレサたちスタッフは朝早くから夜遅くまで奉仕活動を展開するというシンプルなもの。

しかし、その教団活動への参加者が増え、活動領域が広がるにつれて「教団の組織化」という大問題が……。今、マザー・テレサの「神の愛の宣教教会」を大きく支えているのはセラノ神父（セバスティアーノ・ソマ）だが、彼は、もともとはこの教団開設の可否を審査するためバチカンから派遣されてきた人物。

神の啓示に従って、無私無欲の姿勢で奉仕活動に打ち込むマザー・テレサの姿に感銘を受けた彼は、その後カルカッタにとどまり、今やマザー・テレサの片腕的存在となっていた。

そんなセラノ神父の主張は、「教団の組織化」というもの。これは合理的思考経路を持った人間なら誰でも考えることだと私は思うのだが、マザー・テレサは違っていた……。

「運も実力のうち」を実感……？

マザー・テレサのシンプルでひたむきだが、ある意味では世間の常識や法的手続を軽視（？）した奉仕活動は順風満帆とはいかず、再三大きな難関にぶつかることに……。

その第1はハンセン病患者のための「平和の村」をカルカッタのティタガールに建設するについて、法的手続を軽視（？）したことから生まれたもの。しかし絶体絶命と思われる「建設中止命令」や「建物取り壊し命令」を受けながら、危機一髪のところでセーフに……。

第2は寄付金提供者のカネがブラックマネーであることが判明した時。

そして第3は身寄りのない子供の養子縁組を進めていた教団に、人身売買の容疑がかけられた時。

この映画はマザー・テレサの伝記映画だから、このような実話を年代順にしたがって忠実に取り上げていくが、結果的にそのトラブルは、いつも誰かの助けによってセーフになっていく。これは、人間社会の俗な言葉で言うと「運も実力のうち」ということだが、マザー・テレサに言わせれば、それもすべて「神のおぼしめし」……？

金銭感覚の大切さ！

この映画には、1979年の「ノーベル平和賞」の授賞式に出席したマザー・テレサが、得意気に豪華料理のメニューを説明する係員に対して、「その料理はいくらするの？」と問いかけ、「それだけのお金があれば何人もの子供たちを救うことができるのに」と答えるシーンが登場する。この金銭感覚が何よりも大切な原点だ。

組織化が進み、それに伴って不可避免的に官僚が生まれてくると、この官僚たちが「組織のカネを使うのだから、その組織の定め反しない限りは、自由にカネを使えるはず」と考えることはある意味で当然。また組織に不可欠なものが「会議」。その会議の席には、通常コーヒーや水が出されるが、よく考えてみればそのカネは一体誰のもの……？ 組織を動かす官僚たちには、そんなことを気にするヤツは1人もいないだろう。

しかし、手術によって少し病状が回復したマザー・テレサは、会議の席に置かれた1本の水の値段などまるで気にせず、とうとうと組織維持のための演説をぶっている幹部に対して、「銀行口座を閉鎖」「組織はいらない」「もう1度原点に戻って神の命ずる奉仕活動を……」と宣言する。ラスト近くに登場するこのシーンは実に圧巻！

オレも、こんな原点である「金銭感覚」を失わないようにしなければ……？ この映画のこれらのシーンを観たことによって、今後も「ケチの坂和」で進んでいくことにあらためて自信が……？

キリスト教のすばらしさを実感！

私はキリスト教信者ではないし、そもそも宗教心や信仰心がきわめて薄い人間だと自覚している。しかし、今日までの歴史やその中での人間の生き方を考えるについては、宗教が果たしてきた役割は非常に大きく、その意味で私は仏教やキリスト教に大いに興味を持っている。そしてそれは、宗教に関連する映画を観たり、中国旅行で敦煌の莫高窟を見学したりすると、その都度深まってくるもの。

イエス・キリストの生涯を直接描いた近時の話題作は『パッション (THE

PASSION OF THE CHRIST)』(04年)。これを観た時も私はかなり大きなショックを受けたが、同じような感動がこの『マザー・テレサ』でも……。

「私は最も貧しい人々のそばにいたい」という使命感を一生持ち続け、また「私は、神が手に持つペンにすぎないのです」という素朴な神との対話を原点とするマザー・テレサの奉仕活動は、他の宗教にはみられないキリスト教独特のもの……？ そんなマザー・テレサの姿を見ていると、信仰心の薄い私でもキリスト教のすばらしさを実感することができ、再三涙するのだが……？

久しぶりのオリビア・ハッセーにビックリ！ そして複雑な気持……？

この映画の大きな話題の1つは、マザー・テレサをオリビア・ハッセーが演じたこと。1951年生まれ彼女の『ロミオとジュリエット』(68年)に登場したのは17歳の時。私はこの映画を京都で観たが、その長い髪と美しい瞳そして若さに満ちあふれた、弾けるような肢体に、ただ見とれていたことを今でもよく覚えている。その後の彼女の映画は観ていないが、日本人にとってのびっくりニュースは、彼女が日本人、しかも歌手の布施明と結婚したこと。

どうせ長続きはしないだろうと思っていたが、最初の間は結構仲が良かったらしいが、やはり予想どおり(?)約9年で離婚。そりゃ日本人歌手とハリウッド女優がお互いの仕事を続けながら、夫婦関係を仲良く続けようなんて、土台無理な話……？

そんなオリビア・ハッセーは敬虔なカトリック信者であり、このマザー・テレサの役を演ずることが一生の夢だったとのこと。たしかに50歳を越えてマザー・テレサの役を熱演していることはよくわかるし、拍手を送りたいのだが、あの若くピチピチした美しい肢体が目には焼きついているスケベおやじの私としては、何とも言えない複雑な気持……？

2005(平成17)年6月30日記